

[新刊紹介] 近田文弘：桜の樹木学(2016, 技術評論社), 中池敏之：倉田 悟博士の短歌 植物, 民俗, 心象(2016, 羊子出版部), 中池敏之：シダ植物の民俗誌 方言・利用・童歌 (2016, 羊子出版部)

著者	鳴橋 直弘
著者別表示	Naruhashi Naohiro
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	64
号	1
ページ	38-39
発行年	2016
URL	http://doi.org/10.24517/00053298

○近田文弘：桜の樹木学 B4判，207頁，2016年4月25日，技術評論社，2,280円＋税。

本書は，サクラを植物学，民俗学，文学から取り上げているが，中心は樹木として見たサクラの解説書である。

本は，はじめに，第1章 サクラの分類学，第2章 サクラの植物学，第3章 人と桜，おわりに，参考文献からなる。

ふんだんに使われたカラー写真や挿図はきれいで分かり易い。文章も簡潔で読みやすい。また，いたるところで文献が挙げられていることや写真に撮影日が入っていることは読者には有り難い。サクラの花の花卉のもとにある花柄とガクとの間の筒状の部分はヒパンシウム（ハイパンシウム）と言われるが，これは何なのか？雄しべ，花卉，ガク片の基部が癒合したものという考えと，花托が広がって筒状になったものという考えがあった。これまで，前者の説を支持する人が多かった。しかし，著者は後者を採っている。この考えは，最近のDNAの情報から支持されているようである。その結果，従来よく使われた“ガク筒”という言葉を使用せず，この本では“花托筒”を使用し，その根拠を説明している。

177頁の「園年」や179頁の「真田雪村」などは愛嬌といえるが，98頁の「核の中には薄い外果皮と白色の少し厚い内果皮があり」というように，これは？と思う形態的記載が2，3見られるのは残念なことである。

“コシノヒガンザクラの謎”のコラムの中で，コシノヒガンザクラはエドヒガンの変種という考えと，雑種という考えがある。雑種と考えられる場合に関係するサクラは，エドヒガン，オオヤマザクラ，カスミザクラ，キンキマメザクラであるが，これらはいずれも2倍体である。コシノヒガンザクラは3倍体なので，“2倍体の野生同士の雑種ではありません”と著者は書いている。しかし，筆者らの研究ではコシノヒガンザクラはエドヒガンとキンキマメザクラの自然雑種であると結論付けている（鳴橋直弘（1995）越彼岸桜，万華鏡42号1-2頁，ふるさと開発研究所；鳴橋直弘・岩坪美兼・細木真美子・太田道人・綿野泰行（1998）コシノヒガンザクラの正体，植物地理・分類学会，1998年度金沢大会発表）。2倍体同士から直接3倍体が出現することは，キジムシロ属，ヘビイチゴ属，キイチゴ属，サクラ属等で見られ，バラ科では一般的な現象のようである。

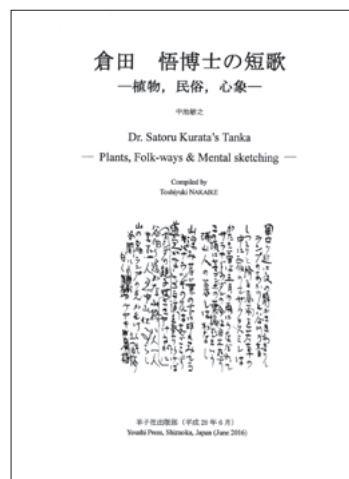
この植物をなぜ“サクラ”と呼ぶのかについてはいくつかの説が報告されている。この本の著者はどの説を信じているのか，または，他の考えがあるのか，筆者には知りたいところである。本書は，サクラについて広く知りたいと思う読者には打って付けの本である。（鳴橋直弘）



○中池敏之：倉田 悟博士の短歌—植物，民俗，心象— A4判，46頁，2016年6月1日，羊子出版部，650円（送料別）

本書は，アイアスカイノデ，イノデモドキ，クモノスシダなどの学名の命名者になっている元東京大学教授の倉田 悟先生が詠まれた短歌集である。構成は，倉田 悟先生の短歌—まえがきに代えて—，倉田 悟先生の略歴，凡例，倉田 悟先生の短歌が載っている文献，倉田 悟先生の短歌，索引，からなっている。全413首の短歌は発表された年代順に整理され，短歌の後の（ ）で，その出所の文献がたどれるようになっている。また短歌の発表の年に，倉田先生が発表された新分類群のシダの和名と著作が書かれている。

先生のお歌の77番に『ちらほらとシラネワラビの影みえてブナの老樹は我を迎えし』と詠まれているが，筆者もブナ帯に入って大きなブナの根元にシラネワラビが生えていたことを思い出したし，195番の『思いの外足どりつよき四人見ゆガンコウランとコケモモの路に』の歌から，越中立山で同様の経験をしたことを思い出した。野外調査や採集に出られた経験のある読者なら，いくつかの歌の中に，倉田先生と同じ心境になったことを思い出されるであろう。本書は愛弟子の中池敏之氏によって，発表済みの倉田先生の短歌に加え，新たに先生の野帳から集録されたものがまとめられている。おそらくほとんどの歌が集録されていると思われる。



本書を購入希望者は、著者の中池敏之氏（〒410-0855 沼津市千本緑町2-8-6）に申し込むと購入できる。
(鳴橋直弘)

○中池敏之：シダ植物の民俗誌（方言・利用・童歌）A4判，177頁．2016年7月26日．羊子出版部．2,550円（送料別）

本書は、2003年に出版された同著者の『シダ植物の方言小辞典』の増補・改訂版であると同時に、個々のシダ植物の文化や利用法を追加したものである。構成は、まえがき、『シダ植物の方言小事典』（2003年）のまえがき、凡例、引用・参考文献、和名（標準和名）から方言、方言から和名（標準和名）、和名（標準和名）の索引、学名の索引、からなっている。

『方言の多くは、人々と植物の関係、すなわち、衣食住、年中行事、子どもの遊び、医療などと強く結びついたもので、その結果、生まれてきたものである。ならば、植物方言を集録する場合は、その植物の文化や利用に関しても記す必要が。』と著者は本書を出版する意図を述べている。

確かに、植物の方言はその地方の文化や利用と深く結びついている。例えば、日本に広く、かつ普通に分布するスギナは、本書では50～59頁と計10頁に掲載されているように非常に多くの方言を有している。この植物は、子どもの遊びに、食用に、食器類を磨くために、草木染めの染料に、民間薬に利用されるほか、さらには雑草として嫌われたりもする等、その利用は地域や文化によってそれこそ多種多様に及ぶ。その違いが方言の違いとなっていると著者は説く。

また、同じ名称でも地域によって指す種が異なる事例も多く集録されている。例えば、“つくし”のことを秋田、岩手、長野、山口県ではヘビノマクラと言うそうであるが、筆者の扱う植物で言えば、ヘビイチゴ（ヤブヘビイチゴも含む）の方言名もヘビノマクラという地方があり、面白い一致が見られ興味深く感じた。

索引として方言から和名（標準和名）が引けるのもありがたい。1～24頁に掲載されている文献はよく集められている。

本書を購入希望者は、著者の中池敏之氏（〒410-0855 沼津市千本緑町2-8-6）に申し込むと購入できる。
(鳴橋直弘)

